

東日本大震災から4年後の現実：備忘録ないしは切り抜き帳(その17)

[2015年7月4日(土)]

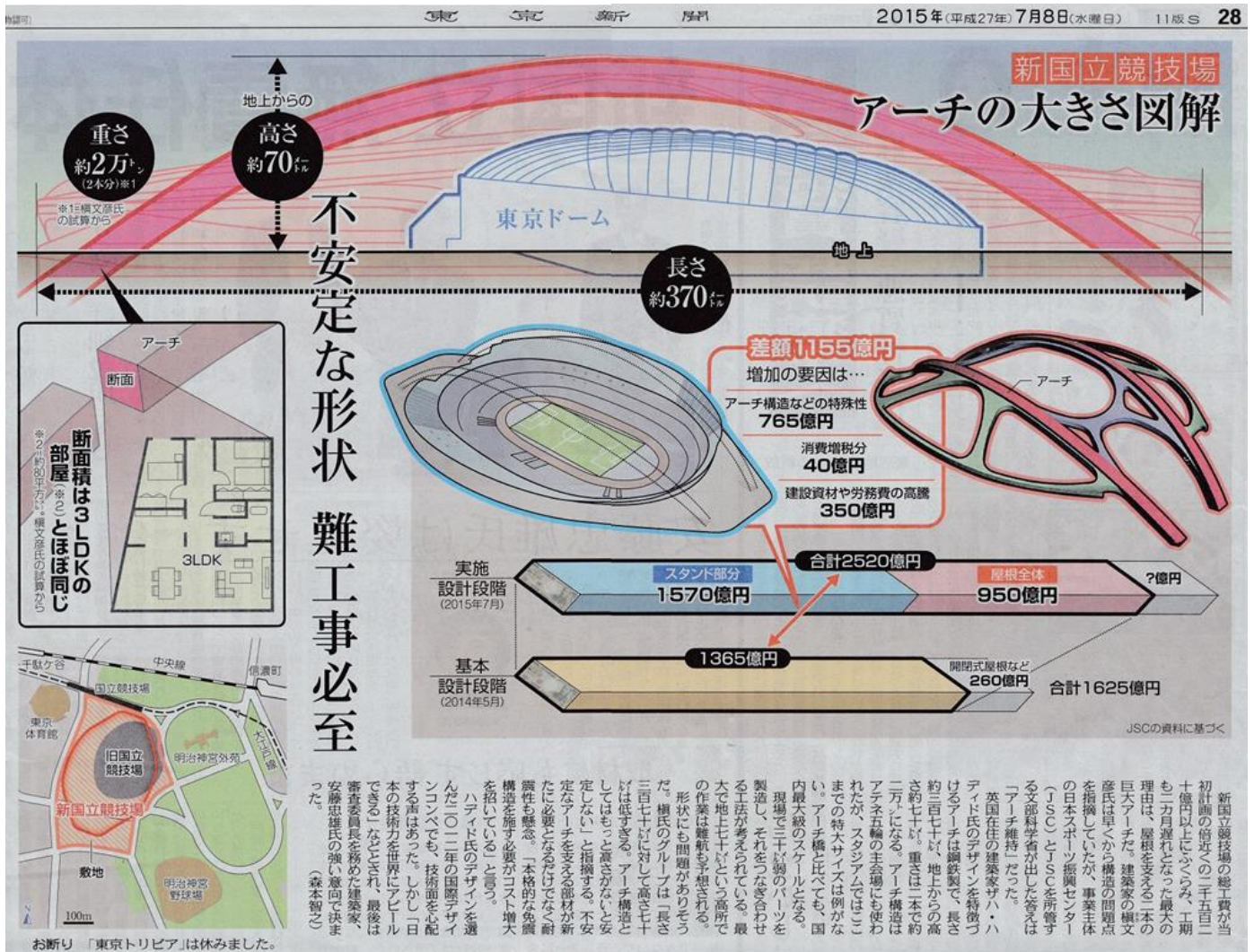
○澤田哲生編『原発とどう向き合うか 科学者たちの対話2011～2014(新潮新書, 2014. 8.)』と、川内博史著『アベノクライシス そこまでして原発続けますか？(竹書房新書, 2015. 6.)』と云う、立場を全く異にする2冊の原発本を読み比べている。前者は原発再稼働を推進したい立場の仲間内で対話をしているので「御用学者」との批判にもぶれることなく、ひたすら原発擁護の姿勢が貫かれている。ただ、①サイエンスとポリシーは分けて議論すべきであること、②放射線リスクや規制値が原発賛成派と反対派とで大きく異なることへの疑問、③活断層の有無がそれほど重要なのか、④巨大メディアは本当に公平に報道しているか、と云った指摘には一度基本に立ち返って、耳を傾けてみる必要があるように思われる。特に、活断層かどうかとも判らないような原発敷地内の小さな岩盤上の亀裂が必要以上に重要視される現状は、筆者も首を傾げざるを得ない。是非とも、仲間内だけの議論にしないで、価値観を異にする人たちにも議論を広げて欲しいものである。ただ1点、最終章で中高生を引っ張り出して浜岡原発等を見学させ、原発への期待感を語らせているのはいくら何でも行き過ぎであろう。後者の川内博史氏は、以前にもこの備忘録(2015/5/5)で取り上げさせて頂いたように、部外者としては初めて福島第一原発1号機の内部立ち入り調査をしたことで知られている。同氏は福島第一原発事故の原因は想定外の津波だけが原因ではなく、特に1号機の水素爆発は地震動による配管損傷が原因ではないかと疑っていて、今回の出版物はそれらの調査の過程を中心にまとめられたものである。これら2冊の出版物の優劣について論じるつもりはないが、それよりも興味深いのは、両者が同じテーブルについて議論したらどのような結末になるかと云う点ではなかろうか。恐らく、仲間内での集まりの中では事前準備は不要であろうが、この場合には“用語の定義”からして慎重にしないと議論はすれ違ったままで、全く噛み合わないのではないかと推察される。折しも、右に掲載させて頂いた東京新聞7月1日版夕刊のコラム“大波小波”に掲載されていたのはこれとよく似た話で、養老孟司氏が“前提”を突き詰めない日本の文系的な知性を批判していることや、芥川龍之介と谷崎潤一郎の小説の“筋”をめぐる論争において議論が噛み合わなかったのは、互いに“筋”の定義を曖昧にしていたことに原因があること等を引き合いに出しつつ、現国会における安保法制の論戦が噛み合っていない点に注目している。同じような答弁を繰り返す安倍首相と、それを切り崩せない野党のどちらにも問題はあがるが、憲法、立憲主義、…、集団的安全保障など、用語の定義を与野党間で共有することがまず先決ではないかと指摘している。

<p>大波小波</p> <p>「あるいは「学問はどれも、前提を問う」が「日本の学問はそれをやらない」などと繰り返して述べ、「前提」を突き詰めない日本の文系的な知性を批判している。この指摘を読んで思いつく。</p> <p>安部法制の「前提」を問う</p> <p>「筋」が「芸術的」かは「非常に疑問」とした芥川に對しては、二人の論争の座りが悪いのは、谷崎と芥川が「筋」の定義を曖昧にしたまま応酬したので、議論がかみ合っていないからである。(文系)</p>	<p>解剖学者の養老孟司が、四人の理系出身者と対談した「文系の壁」(PHP新書)は、科学、社会などについて文系とは異なる見方を示している興味深い。</p> <p>養老は「日本の文系」には「前提の吟味」がない、</p> <p>「筋」は「芸術的」かは「非常に疑問」とした芥川に對しては、二人の論争の座りが悪いのは、谷崎と芥川が「筋」の定義を曖昧にしたまま応酬したので、議論がかみ合っていないからである。(文系)</p> <p>「筋」は「芸術的」かは「非常に疑問」とした芥川に對しては、二人の論争の座りが悪いのは、谷崎と芥川が「筋」の定義を曖昧にしたまま応酬したので、議論がかみ合っていないからである。(文系)</p> <p>「筋」は「芸術的」かは「非常に疑問」とした芥川に對しては、二人の論争の座りが悪いのは、谷崎と芥川が「筋」の定義を曖昧にしたまま応酬したので、議論がかみ合っていないからである。(文系)</p>	<p>問はそれをやらない」などと繰り返して述べ、「前提」を突き詰めない日本の文系的な知性を批判している。この指摘を読んで思いつく。</p> <p>安部法制の「前提」を問う</p> <p>「筋」は「芸術的」かは「非常に疑問」とした芥川に對しては、二人の論争の座りが悪いのは、谷崎と芥川が「筋」の定義を曖昧にしたまま応酬したので、議論がかみ合っていないからである。(文系)</p> <p>「筋」は「芸術的」かは「非常に疑問」とした芥川に對しては、二人の論争の座りが悪いのは、谷崎と芥川が「筋」の定義を曖昧にしたまま応酬したので、議論がかみ合っていないからである。(文系)</p> <p>「筋」は「芸術的」かは「非常に疑問」とした芥川に對しては、二人の論争の座りが悪いのは、谷崎と芥川が「筋」の定義を曖昧にしたまま応酬したので、議論がかみ合っていないからである。(文系)</p>
--	---	--

[2015年7月11日(土)]

○福島第一原発事故の後始末を含めた東日本大震災の問題、九電川内原発をはじめとする各地の原発再稼働の問題、安保関連法案をめぐる国会審議の問題、沖縄普天間基地の辺野古への移設問題、マイナンバー制度の問題など、悩ましい問題が山積する中で、もう一つ悩ましいのが新国立競技場の建設をめぐる問題である。7月7日に開催された国立競技場将来構想有識者会議において、総工費を2,520億円とする案が了承されたとのことで、維持管理費は今後50年間で1,046億円、実質的な赤字は毎年20億円程度との見通しも同時に確認されている。この会議のメンバーは大会(2020年東京五輪・パラリンピック)組織委員会会長の森喜朗氏、東京都知事の舛添要一氏をはじめとする14人で構成されていて、建築関係者は競技設計の審査委員長を務めた安藤忠雄氏ただ一人であるが、その安藤氏は当日の非常に重要な決断を下すこの会議を欠席している。そもそも新国立競技場の計画がスタートしたのは2012年のことであって、2013年9月のプエノスアイレスにおけるIOC総会で東京が2020年の開催都市に選ばれた際には、この主会場の斬新なイメージが前提として存在していたはずであるが、先行していたのはイメージのみで、日経BP社ケンプラッツのウェブサイトによれば、国際競技設計の選考過程が日本スポーツ振興センター(JSC)によって公開されたのは2014年5月30日のことであった。

不思議なことに、この大規模な国家プロジェクトの競技設計を審査した審査委員長の安藤忠雄氏はおろか、基本設計を担当したザハ・ハディオ氏でさえ、本人が手掛けた建築物の総工費や工期や施設実現の可能性について何らの見通しを持っていない(審査結果では、チャレンジするに値する斬新な造形が評価されており、技術的な難しさもむしろプラスの評価であって、コスト高を指摘する一部審査委員の声は無視されている)。さらに、事業主体が国なのか、文科省なのか、JSCなのかすら曖昧なまま、膨大な事業予算を捻出する目処も立っていない状態で、建築については素人集団(?)の有識者会議がこのようないい加減な国家プロジェクトに対してゴーサインを出した訳で、関係者のすべてが無責任と云わざるを得ない状態が今日まで続いている。この有識者会議の翌朝の東京新聞(7月8日)に掲載された下の図面入りの記事は、特に建築の構造面から、この計画案の不可解さを判りやすく説明してくれている。デザインのことはひとまず置いておくとして、問題はキールアーチと呼ばれているアーチの形状と大きさである。建築家の槇文彦氏によれば、スパン370mもの巨大アーチを自立させるには総量2万トン(2本分で)、断面積が80m²(3LDKの部屋とほぼ同じ)ものスケールになるそうで、これでは建築物というよりは巨大土木構造物ではないか。しかも槇氏も指摘しているように、アーチを形成する上でスパン370mに対して高さ70mというのは扁平すぎてバランスが悪い。下の図面で表現されていない地下部分のアーチ固定方法に莫大なコストを要するものと考えられる。事業主体が明確でないので結論はズルズルと先送りされているが、こんなバカげたことに膨大な国家予算が空費されることは誰も望んでいないのではなかろうか。



[2015年7月13日(月)]

○昨日の日曜日、定番のTV番組は朝7時から三宅裕司氏の“ゲンキの時間”，7時半からは加藤浩次氏の“がちりマンデー”そして8時から関口宏氏の“サンデーモーニング”とTBSの3本立てであるが、サンデーモー

ニングではトップに『膨らむ総工費…新国立競技場』を持ってきていた。これ以外にもトップニュースは各局とも新国立競技場問題を取り上げていたが、その中で現在の状況を良しとする意見はどこにもなかったと思われる。ヤフーニュースにはその後、安藤忠雄氏から「デザイン決定後の基本設計や実施設計には、審査委員会はかかわっていない」とのコメントが寄せられたようであるが、もしこれが本当だとすると、あの競技設計とは経費を度外視した単なるイベントであって、それを最大限に利用し、五輪会場は首都圏の8km圏内に収めるだの、福島第一原発の事故は“under control”の状況にあるとウソまでついて東京五輪招致を勝ち取った組織にこそ問題があったと云うこと

だろうか。あるいは、2013年9月のプエノスアイレスでIOC会長が“TOKYO”と宣言したその時から、JOC関係者のみならず日本国中がおかしくなってしまったのだろうか。それならそれで、安藤氏はその時にこそ「これは単なる競技設計であって、1,300億円の財源では実現は到底無理」であると発言すべきで、一緒になって浮かれています。右にいつもの東京新聞“本音のコラム”（7月12日）を掲載させて頂いたが、今現在の世相を一番良く反映しているのではないかと考えている。さらに、同日の東京新聞には紙面2ページをフルに使って『安保法案本紙アンケート 憲法学者120人の声』が掲載されていた。アンケートに回答した204

人のうち実名公表に同意した120人の意見が要約されて紙上に掲載されていたが、統計結果を見ると“安保法案は憲法に照らして合憲か違憲か”との設問に対して、法案を“違憲”としたのは184人（90%）で、そのうちの6割超が集団的自衛権の行使容認が憲法を逸脱していることに言及しており、“合憲”は7人、“その他”は13人出会った。また“憲法九条は改正すべきかどうか”との設問には、153人（75%）が“改正するべきではない”と回答しており、“改正するべきだ”が17人、“その他”や無回答が34人であったとのことである。

2015年7月13日 文責：瀬尾和大

本音の
コラム



愚かな為政者は、あらゆる問題について愚かな決定をするものだと思感させられている。言うまでもなく、新国立競技場の件である。世界に対して新しいスタジアムを造ると約束したとか、二〇一九年のラグビー・ワールドカップに間に合わせるためには今決めなければならぬとか、おおよそ理由にならない説明ばかりだ。結局政治家の見えのために途方もない無駄遣いが決定された。新国立競技場、安全保障法制、原発再稼働。これらの政策決定は、日本政治をむしろ無責任という病気の症状なのである。この病は、戦後政治学のパイオニア、丸山真

ニッポン無責任時代

山口 二郎

男が大日本帝国の戦争遂行過程を分析する中で見いだしたものだ。この病にかかった指導者の特徴は、既成事実へに屈服する。事実を直視できず、希望的観測に基づいて行動する。まずいと思っても自分には止める力がないと諦め、保身に走るなどである。集団的自衛権を行使しても敵方は日本を攻めることはないだろうとか、噴火が原発を襲うことはないだろうとか、空想的樂觀主義の下で政策決定が進んでいる。戦後七十年、日本には一応民主主義が定着したはずである。しかし、無責任の病は深刻の度を増している。さまざまな失敗に目をつぶり、何も考えずに無責任な政治家を当選させるならば、国民全体も無責任と後世の人々に批判されることになる。(法政大教授)